歴史的ツーバイフォー建築物を訪ねて―明治～昭和初期―

第三回

北海道を象徴するシンプルなアメリカ風建築

内田 青蔵（神奈川大学建築学部教授）

①札幌市時計台。明治の洋風木造建築を代表し、北海道開拓史上記念すべき遺構のひとつとして国の重要文化財に指定されている。時計塔は安達喜幸氏による和風のデザイン。
②③レースで覆われているような玄関と軒の出。2階の軒には持ち送りがあり、破風飾りには赤い星装飾がある。正面の開口部は上げ下げ窓で、左右対称に配され、端正さを感じさせる。

北海道を象徴する札幌市時計台
外観はシンプルな意匠

「北海道を代表する建築は？」と訊ねたならば、多くの方々が挙げるのが札幌市時計台ではないか。急勾配屋根の木造2階建ての飾り気のないシンプルな姿は、見ていて清々しい。外壁も極めて簡素で、白ペンキ塗装が施された板張り仕上げ。イギリス下見（南京下見）と呼ばれる厚さ15㎜ほど、幅10㎝ほどのしっかりした厚さの板材を長押挽きにし、下端を下の板の上端に重ね、水平に張った下見板張りだ（図1）。板を重ねるのは、下見板を伝った雨を壁から切り離すためだ。壁面には水平線がくっきりと現れるものの、それ以外の装飾らしいものはほとんど見られない単純なつくりだ。

それでも、改めて時計塔の聳（そび）える玄関正面を見ると、玄関ポーチの軒先の鼻隠し板には、少し控えめなのこぎりの歯のようなレース模様が見える。2階の屋根の軒下には独特の形状の持ち送り（ブラケット）が見えるし、軒先にも同じレース模様が見える。まるで建物全体をそっとレースで覆っているようだ。そして、破風飾りには、赤い色の星形装飾が2つあり、アメリカとの深い関係を暗示させている。

開拓使の設置
目標は農地開拓と産業育成

1869（明治2）年、明治政府は北海道の開発とロシアの侵略を防ぐ警備のため、開拓使という役所を設置した。開発にあたっては、製鉄や造船技術の導入をオランダやフランスに依頼したように、西部開発などを実践していたアメリカに技術援助を求めた。これが契機となって、アメリカの農務局長だったホーレス・ケプロンらが1871（明治4）年に来日した。ケプロンは、開拓使御雇教師頭取兼開拓顧問として、道路計画から産業、農業、教育などについて様々な助言を行った。現在でもビール産業が有名なのは、北海道の気候をもとに農業として麦の生産を指導したからである。そして、有名なクラーク博士が来日し、「Boys, be ambitious!」という言葉を残したのだ。

札幌農学校の創設と
バルーン・フレーム構法による演武場の建設

クラーク博士は、現在の北海道大学の前身で、1876（明治9）年に創設された札幌農学校に招かれた。キャンパスがあったところは、現在の時計台のある周辺で、この時計台と称される建物は、創建時は演武場として、1878（明治11）年10月に竣工している。2階建ての建物は、1階に博物室と2部屋の講義室が設けられ、2階全体を演武場が占めた。

設計者は、札幌農学校で土木・数学教師を務めるウイリアム・ホイーラーであった。ホイーラーはクラークの教え子で、1871（明治4）年にマサチューセッツ農科大学を卒業し、クラーク博士と一緒に来日していた。

ホイーラーは、設計にあたって簡単な図面とともに9項目からなる設計指針を定めている（図2）。これによれば、2階の演武場は天井を張らずに、sky-blueに着色した小屋組を見せること、小屋組は合掌の上部をつなぎ梁（カラービーム）と、下方を鉄筋のタイバーで支えることなどが指示されていた（越野武『北海道における初期洋風建築の研究』北海道大学図書刊行会 1993年）。この合掌となる垂木材は板材で、それらをつなぎ梁でつなぐ構法は、まさしくバルーン・フレーム構法の特徴であった。

なお、構法に関しては、戦後の解体調査時には軸組として角材の柱が確認され、純粋なバルーン・フレーム構法ではなかったが、これらの角材は戦前期の改修時に補強として入れられたもので、創建時は外観のデザインとともに構法もまさしくアメリカで生まれたバルーン・フレーム構法による建築であったと考えられている。

演武場から時計台へ
新しい時代を告げる建物として親しまれる

創建時の演武場には、時計塔はまだ設置されていなかった。翌年の1879（明治12）年にアメリカのハワード社から届いた時計は、予定していた鐘楼を超える巨大なものだったため、急遽改造工事を行い設置した。その結果、演武場よりも聳える時計塔が目立つ建物となり、いつからか〝時計台〟と称されるようになった。時を知らせる時計を掲げる建物は、まさしく新しい時代を告げる建物として人々に親しまれたのである。

④⑤2階演武場。天井を張らずに小屋組を見せる大空間として設計された。小屋組の垂木材は板材、合掌の上部をつなぎ梁と下方を鉄筋のタイバーで支えている。

創建当初の演武場（左奥）。校庭に面して建てられ、このときには時計塔はまだない。札幌農学校の移転後に当時の札幌区が買上げ、1906年に道路整備のため100mほど南の現在の位置に曳家された。（北海道大学附属図書館所蔵）

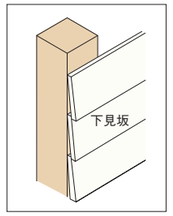
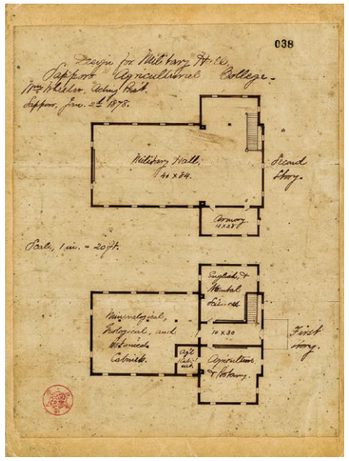


図1：時計台の外壁に施された下見板張り「イギリス下見（南京下見）」。



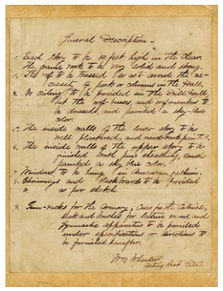


図2：ホイーラーが作成した札幌農学校演武場の基本構想図と手書きの設計指針。（北海道大学附属図書館所蔵）

参考資料／
越野武『北海道における初期洋風建築の研究』北海道大学図書刊行会 1993年
池上重康『札幌市時計台（旧札幌農学校演舞場）』『日本近代建築大全 東日本編』講談社 2010年
池上重康『明治初期日本政府蒐集舶載建築書の研究』北海道大学出版会 2011年

DATA
旧札幌農学校演武場（札幌市時計台）
竣工年／1878（明治11）年
所在地／北海道札幌市
設計者／ウイリアム・ホイーラー